

戦前期日本における聖火リレー

— 一九六四年東京オリンピック再考の手がかりとして —

浜田幸絵

一 はじめに

東京オリンピックの記録映画（市川崑監督）は、オリンポスの丘で採火された聖火が日本へ向かうシーンから始まる。

多くの人々の手から手へリレーされ、エーゲ海を、果てしない亜熱帯の陽炎の中を、シリア砂漠を、イラン高原を、そして東南アジアを運ばれる聖火。オリンピックの火が初めて通る国々。オリンピックの火が初めて東洋に來るその意味を深く考える人、お祭り騒ぎで迎える人、素直に喜ぶ人。私たちは、オリンピックが世界の平和を願うものだと知っている。人間が人間として全く平等であろうとする信念に支えられていることを知

っている。だからオリンピックの象徴である聖火を祝福する。

聖火がオリンピックの神聖さを示すシンボルであるという認識は、今日では広く共有されており、この映画の語りには違和感を抱く人はほとんどいないだろう。聖火リレーは、現在ではオリンピックの重要な構成要素の一つであり、時には競技以上にオリンピックの精神を表象している。しかし、歴史的にみると、スタジアムに灯された火が「聖火」と呼ばれ、オリンピックのシンボルとして認識されるようになったのは、比較的最近である。オリンピックが平和の祭典であるというのも一つの創られたイメージにすぎない。近代スポーツの起源は西洋にあるわけであるが、日本では、西洋文化と日本の伝統文化の双方を包含することでは

じめてスポーツ・イベントが国民意識の統合という役割を果たすようになったと考えられる。本稿では、一九四〇年東京オリンピックの計画、オリンピック返上後に開催された東亜競技大会や神宮大会等の戦時下の体育イベントから、戦後のオリンピック、アジア大会、国民体育大会に至るまでの一連のスポーツ・イベントの主催者やマス・メディアが聖火リレーをどのような儀式として意味づけていたのかという観点から、新聞記事や大会報告書を分析し、スポーツ・イベントのもつ意味の多層性と葛藤を明らかにしたい。

一九六四年東京オリンピックの聖火リレーは、日本各地で実際のオリンピック以上の大事件として受け止められた^①が、戦前の日本では、聖火や聖火リレーの社会的意味は不定形で、あらかじめ決まった物語があつたわけではなかつた。ただ、当時の日本には、儀礼・神話・シンボルによつて、政府・メディア・民衆が、同調的に国家に献身する国民の物語の中に包み込まれていく状況があり、聖火や聖火リレーも、そうした総力戦体制のシンボルや儀礼であつたと考えられる。また、東京オリンピックの聖火リレーは、一九三〇年代後半以降の日本独自の聖火リレーの歴史と、オリンピック大会自体の聖火リレーの歴史の重層性の上に成立していたといえるだろう。ここでは、戦前期にオリンピックの聖火リレーが日本に輸入され、いわば日本の新し

い伝統として聖火リレーが創造される過程を、六四年東京オリンピックの体験の基盤の一部が形成された時期としてみていくこととする。

二 創られた伝統としてのオリンピック聖火

通過儀礼の古典的図式にあてはめるならば、オリンピックの丘から始まる聖火リレーは、「通常の生活」からの分離儀礼^③で、オリンピック競技が行われる神聖な時間の到来を告知している。しかし、聖火リレー等のオリンピックの儀式的要素は、初期の大会では未完成で、開会式において入場行進やオリンピック讃歌斉唱が行われたのは一九〇八年^④、オリンピック旗掲揚、選手宣誓、鳩を用いた演出が始まったのは一九二〇年であつた。聖火が初めてスタジアムに登場したのは一九二八年、聖火リレーが始まったのは一九三六年である。ボブズボームは、一八七〇年から一九一四年の西洋社会で数多くの伝統が創出されたことを指摘し、政治的伝統と社会的伝統を結合した伝統の一様式として中産階級のスポーツや国際イベントとしてのオリンピックの例を挙げているが、聖火や聖火リレーも、近代になって新しく創出された伝統として理解できる。

しかし、二八年アムステルダム大会時には、新しく創られた伝統としての聖火をオリンピックのシンボルとして解

釈する枠組みは、欧州でも社会的に共有されていたとはい
いがたかった。大会公式報告書には、聖火に関する記述は
ほとんどなく、「輝くマラソン塔とスタジアム広場」(The
illuminated Marathon Tower and Stadium Square)と
説明された写真が掲載されているが「オリンピック聖火
(Olympic Flame/torch)」という言い方は見当たらず、主
催者側でもこの新しい演出の意味づけが曖昧なままであつ
たことを伺わせる。

日本人の間にも、今日聖火と呼ばれる演出を特別なもの
として解釈する枠組みは、二八年大会時にはなかった。日
本選手団の報告書には、競技場についての記述の中に、「此
の塔(引用者注・マラソン塔)の最頂端には煙をまく台脚
が造られ、オリムピック競技開催中は日夜火を燃き遠くか
ら煙を望むことが出来る。此れは希臘のオリムピア競技に
於ける古式に則つたものである」とあるが、聖火への言及
は他にはほとんどなく、聖火が日本選手団に特別に強烈な
印象を与えていたとは考えられない。新聞でも、この頃には
オリムピック関連の報道量がかなり増えているが、『東
京日日新聞』(以下、『東日』)に「スタジアムの一端に聳
ゆるマラソン塔から白煙揚り」とあるだけで、『東京朝日
新聞』『読売新聞』(以下、『東朝』『読売』)の開会式の記
事には、マラソン塔の火への言及はない。

三二年ロサンゼルス大会では、日本の新聞でも、「かが
り火」や「オリムピックトーチ」という言い方ではあるが、
聖火に関する記事や写真が掲載されるようになり、「西曆
紀元前七百七十六年のギリシャの古代オリムピックを忍ば
せるに十分」等、それに関する記者の感想もみられる。た
だ、報道量は少なく、聖火が古代ギリシャに由来すること
やオリムピックの神聖さを示すシンボルであることを一般
の人々は漠然としか認識していなかったと考えられる。日
本、朝鮮、中国、ヨーロッパに共通して火祭りの儀礼がみ
られるように、火に一定程度の神聖さを見出すのは普遍的
だと考えられるが、スタジアムに灯された火を指す言葉と
して当時用いられていた「かがり火」は、通常生活から分
離された祝祭空間のシンボルというよりは、日常的な火と
いう意味を帯びている。見出しの中に、「かがり火」や「オ
リムピックトーチ」といった言葉が登場することも少なく、
例えば、『東朝』の開閉会式の記事見出しを飾ったのは、
五輪旗の掲揚・下降であり、聖火の点灯・消滅ではなかつ
た。

聖火リレーが実施されたのは、ナチス政権下で開催され
た三六年ベルリン大会である。リレーの形式が導入される
ことよって、聖火の意味は、リレーのルートやそれを運
ぶ人々との関係で創りだされるようになる。この時の聖火

は、三〇七五人の走者によつて、ギリシャ、ブルガリア、ユーゴスラビア、ハンガリー、オーストリア、チェコスロバキア、ドイツと十一日間かけて運ばれ、開会式でスタジアムの聖火台に点火され、大会会期中の十六日間燃え続けた。組織委員会の考案した各国の首都を通過するルートは、一九三四年秋に各国オリンピック委員会に伝えられ、その後、走者の速度やトーチの開発等の緻密な計画が立てた上で実行に移された。聖火リレーには、ドイツ放送会社ならびにベルリン大会記録映画撮影班が同行し、通過地では真夜中であつても全住民が聖火を出迎えたという。聖火リレーは、古代ギリシャと近代オリンピックの連続性を示す仕掛けとして公式に意味づけられ、このタテマエが、ドイツ人のみならずオリンピック委員会や通過国の支持を獲得したといえる。ただ、この聖火リレーは、ドイツでは二重三重の意味をもつていた。アリア人^①を古代ギリシャ人の子孫と考えるナチスにとつて、オリンピアからベルリンへの聖火リレーは、古代ギリシャとドイツの文化的連続性を世界に示す絶好の機会であつた。また、ナチスのイベントでは、松明行進が象徴的に重要な意味をもつていた。

この聖火リレーについて、日本では、『東朝』『東日』『読売』の全てが、オリンピアでの採火式、主要都市の通過、開会式での聖火台への点火、閉会式での消滅等の出来事を

報道した。聖火リレーを古代ギリシャ文化との関係で説明した記事はそれほど多くはないが、見出しや写真で聖火が取り上げられることが増え、オリンピック報道における聖火の重要性は増したといえる。また、三二年大会時に一般的であつた「かがり火」に代わり、「聖火」や「炬火」といった言葉が用いられるようになった。特に「聖火」という言葉の普及は、オリンピック発祥地からリレーされ、大会期間中、聖火台に灯されていた火が、単なる煙やかがり火ではなく神聖な火として認識されていたことを示している。ナチスは、開幕前にはボイコットの動きもあつた大会を成功させ、各国の自国に対するイメージを改善したといわれており、日本でも、施設・設備の豪華さ、挙国一致の大会運営、対外的宣伝の方法、ヒトラーの指導力等が肯定的に報道・報告され、ベルリン大会は、四年後の東京大会のモデルとして捉えられていた。聖火リレーも、ベルリン大会の成功をもたらした重要な大会構成要素の一つとして受け止められたと考えられる。

ベルリン大会の頃には、聖火は、現地取材をする記者だけではなく日本の人々の間でもオリンピックに神聖性を付与する特別なシンボルとして認識されていた。ベルリン大会開幕直前に一九四〇年の東京オリンピック開催が決定するが、このニュースは、「一九四〇年オリムピッ

クの聖火ははじめて東方へ海を渡つて行く、アジアの東京へ！世界の東京へ！」等と伝えられている。

だが、東京大会の準備が始まると、ギリシヤから東京への聖火の物理的移動は、必ずしも前提とはならなかった。次章でみるように、東京オリンピックの聖火リレーを實際に実施することになると、聖火リレーの意味づけをめぐつて、様々な議論・かけひきが始まったのである。

三 一九四〇年東京オリンピックの聖火リレー計画

東京オリンピックの招致運動が本格的に始まったのは、東京市長の永田秀次郎がオリンピック招致に積極的な姿勢を見せ始めた一九三〇年頃である。一九三一年十月には、東京市会で「国際オリンピック競技大会開催に関する建議」が満場一致で可決され、一九三二年七月のIOC総会で東京市長の正式招請状が受理された。四〇年大会は当初はローマでの開催が有力だったが、アジア初のオリンピックを実現しようという主張は、最終的にIOC委員らの支持を獲得し、ベルリン大会直前に、東京での開催が決定した。日本にとつて、一九四〇年東京オリンピック開催は、政治的にも、経済的・社会的にも意義のある出来事であった。まず、政治的には、東京オリンピックの準備が進められた一九三六年から一九三八年は、対外情勢の悪化に伴い、

満州事変以来主張されてきた対外宣伝の重要性がこれまでに以上に喧伝され、日本国内の言論・情報の統制が強化されていった時期であった。政府では、帝国日本がアジアに進出していく際の大義名分を補強するという観点から、博覧会・国際会議等の開催や雑誌・パンフレットの発行によつて、日本に好意的なイメージを対外的に形成していくことの重要性を認識していた。特に一九四〇年（皇紀二千六百年）は、オリンピック、万博、様々な紀元二六〇〇年記念事業が予定されていた。情報委員会の紀元二六〇〇年に関する宣伝方策大綱には、「此ノ機会ニ関連シテ適切ナル宣伝ヲ行ヒ、真ノ日本ニ対スル国民ノ自覚ヲ強化シ又公正ナル日本ヲ中外ニ顕示シ以テ国力ノ充実ニ寄与シ国威ヲ宇内ニ宣揚シテ国運ノ隆昌ヲ期スルニ在リ」とある。

また、オリンピック開催には、輸出拡大や観光客誘致による外貨獲得、技術革新の促進等の意義もあった。古川隆久によれば、一九四〇年のオリンピックや万博の計画は、紀元二六〇〇年という皇室ブランドを表面きには掲げながらも、実際には社会資本整備や経済効果への期待を背景に展開していた。東京大会決定をうけ、日本放送協会は、「ラジオ日本の威容を世界に顕示すべき絶好の機会」としてテレビジョンの開発にあたり、スポーツ医学界は、地元開催のオリンピックでベルリン大会以上の成績を日本選手がお

さめることを目指した²⁴。東京オリンピックは、発展を志向する各界の照準として捉えられていたといえる。

一方で、東京オリンピック開催決定直後の新聞は、一般国民のレベルでは、オリンピックが消費文化の中で受け入れられていったことを示している。

銀座を通ると五輪のオリムピック模様衣装の女の子が五人、軒を並べた商店の飾窓では、ガラスに描いた「オリムピック東京万歳」―気の早いデパートではもうオリムピック便箋売り出しの商略に抜け目ない、浅草のレヴューの楽屋裏を覗くと、汗を流した作者が新案オリムピック・ステツプの創作に夢中となり、暑い舞台では、掛合万歳が「いよいよ東京オリムピック、はい!」とやっている。

街から街へ伝はる号外の鈴の音に点綴されてデパートの屋根の下、劇場の軒、オフィスの窓に翻へる五輪の旗の下に東京四年間の興奮の初まりである²⁵。

ほかにも、新聞は、「五輪を象った女性の髪型」を「初秋の流行」²⁶と紹介し、五輪マークのハンドバッグや水着の販売を報じた。オリンピックは国民の自覚を強化し、国威を発揚する機会として国家戦略の中で認識されていたが、

少なくとも大会決定直後の段階では、国民は、東京でのオリンピック開催を消費や娯楽と結びつけて捉えていた。

さて、東京オリンピック開催に向けた準備が行われた一九三六年八月から一九三八年七月までの間、聖火リレーの実施をめぐるのは、複数の案が存在していた。中村哲夫は、招致段階では、アジア初のオリンピックをという主張と紀元二六〇〇年を記念してオリンピックを開催しようという主張が矛盾することはなく、ともに東京オリンピック招致運動の重要な根拠となっていたが、東京大会開催が決定し具体的な準備が始まると紀元二六〇〇年にオリンピックを開催することの矛盾が現れてくると論じている²⁷。こうした矛盾は、聖火リレーをめぐる議論にも反映されていた。

まず、聖火リレーを国内から実施する案としては、宮崎県から高千穂峰の聖火を推す声が挙がったほか、宇治山田市からも聖火リレーの出発点を皇大神宮とすることを求める陳情が寄せられた²⁸。『東朝』には、「これだ!東京大会の表徴、『悠久の聖火』を翳し日向から大リレー、早くも勃然たる運動」という見出しで、次のようにある。

皇紀二千六百年に当り東京で開催されるオリムピック大会に皇祖発祥の地たる宮崎から東京まで千五百キロの聖火大距離リレーを決定せんと予てより宮崎県学務課で

立案中のところ、愈々具体案を得たので県内学務部長の名を以て先づ全国各府県体育主事と呼ばかけ国家的事業として実現の猛運動を起すこととなつた、右案によると第十二回オリムピックのプログラムとして神武天皇御東遷に倣ひ聖火を皇祖発祥の地日向から陸路東京に運ぶべく関係各府県から二十八名の選手を選抜、十四日間で走破し全コースを第一日宮崎延岡間、第二日延岡別府間、第三日別府門司間、第四日門司下関防府間、第五日防府広島間、第六日広島尾道間、第七日尾道岡山間、第八日岡山神戸間、第九日神戸京都間、第十日京都岐阜間、第十一日岐阜豊橋間、第十二日豊橋静岡間、第十三日静岡小田原間、第十四日小田原東京間に分け一区間平均百十キロ総予算四万五千百九十円は参加各府県が分担しようといふのである。²⁹⁾

さらに、同記事では、一九一二年に日本が初めてオリンピックに参加した時の選手の一人である金栗四三のコメントを引用して、聖火リレーが、ドイツの模倣ではなく、日本の伝統であることを強調している。

東京オリンピックの行事として皇祖発祥の地日向から聖火リレーを行ふことは誠に結構なことと思ひます、東京

の人だけでなく地方の人々もオリムピックの関心を深め、国民精神を作興するといふ点で大いに意義があるでせう、ぜひ実現させたいものです、ドイツの真似をしなくてもいゝ、といふ人もあるかも知れませんが元来長距離を一人又は数人で走ること例へば駅伝競走の如きは欧米よりも日本の方が盛んだつたのです。³⁰⁾

聖火リレーは、神話上の国家起源の地を出発点とし、駅伝の一種とみなすことによつて、日本の歴史的文脈で捉えなおされ、国民精神作興に寄与すると解釈された。オリンピックを神聖化する形式として聖火リレーを認識しつつ、神聖さの起源は、ギリシャではなく日本国内に求めたのである。東京大会の聖火リレーを日本の国家の歴史を辿るかたちで実施しようという計画は、オリンピックを紀元二六〇〇年の国家事業として意味づけようとする立場の支持を獲得したと考えられる。

一方で、海外からも、アテネからの聖火リレーのルートと輸送方法（空路・水路・陸路等）の提案が行われた。³¹⁾ 例えは、『読売』は、オーストリアのスポーツ評論家の壮大な聖火リレー計画を報じている。

炬火リレーはギリシヤのオリムピアから東西南北の四

方へ走者を出した。走るばかりでなく飛行機、汽車、汽船、スキー、自動車、自転車等場所によつてあらゆる交通機関を利用しオリンピック旗の象徴する世界の五大洲に限らず聖火を輝かさうといふので、次のやうに具体的なコースまで考へてゐる

◇東への道　オリムピア―コリント―アテネ―ピレウス湾（古代ギリシヤ型の小舟で渡る）―エーゲ海―ダーダネルス海峡―コンスタンチノープル（上陸）―トルコ―シリア―パレスチナ―トランスヨルダニア―（沙漠）―イラク―ペルシア―アフガニスタン―印度―（德里）から飛行機でネパール・ブータンを超え世界の尾根ヒマラヤ山脈を眼下に見て）―ビルマ（着陸）―シヤム―印度支那―支那―黄海―日本

▽若し次回大会にソヴェエトが参加するやうになればシベリア横断も考へられる

◇西への道　オリムピア―ピルゴス―ヨナの海―イタリー（上陸）ゼノア―アルプス越えてスويس―ドイツ―ルクセンブルク―ベルギー―オランダ―イギリス―大西洋―カナダ―太平洋―日本

▽このコースの第二案としてドイツからフランスに入りフランス―大西洋―米国―ロサンゼルス―太平洋―日本

▽同じく第三案としてフランス―スペイン―ポルトガル―大西洋―メキシコ―パナマ―太平洋―日本

◇南への道　オリムピア―スバルター―エジプト―（キヤラバンと共に駱駝を利用）―ケープタウン―飛行機で南極を廻り豪州へ上陸―ニュージーニア―ボルネオ―フィリッピン―日本

このコースの第二案としてアフリカ―南米―ニュージーランド―豪州―日本

◇北への道　オリムピア―ブルガリア―ルーマニア―ポーランド―レトニア―ラトビア―エストニア―フィンランド―ノールウエー―ハムメルフェストから飛行機で北陸道を通り日本へ着陸

▽第二案としてオリムピア―アルバニア―ユーゴスラビア―ハンガリー―オーストリア―チエツコ―ドイツ―デンマーク―スエーデン―ノールウエー（ハムメルフェスト）

以上の計画はひどく奇想天外なものだがフオーゲル氏は「各国オリムピック委員会がその気になつて協力すれば必ず成功する」とすましてゐる。

こうしたルートについても日本の新聞は肯定的に報じた。特にこの記事は、ヨーロッパのスポーツ界が、東京でのオ

リンピック開催に「従来と変わつた特殊の魅力を感じてゐる」こともあわせて伝えている。アテネから東京への聖火リレーは、ベルリン大会の聖火リレーと同様に、古代ギリシャとオリンピック大会との連続性を示すものであるが、同時に、西洋と日本との文化的連続性を示す仕掛け、アジアの盟主としての日本の国力を対外的に誇示しそれによつて国民意識の統合を図る機会としても理解可能である。

このような状況で、組織委員会の方針も二転三転した。まず一九三六年十月には、IOC委員の副島道正が、アテネから東京へのリレー計画をロンドンで発表した。『東朝』によれば、その計画では、聖火は、一九四〇年の紀元節にアテネを出発し、欧州各都市を通過した後、アデンからインド、シンガポール、フィリピン、上海を経て、門司に輸送、日向高千穂峰に登り建国二六〇〇年を奉賀し、伊勢神宮、明治神宮を経て大会会場に入ることとなつていた。³⁵これは、前述の国内リレー計画と国外リレー計画を組み合わせた折衷案である。しかし、一九三七年四月には、アテネからの経費・方法等に相当な困難があり、IOCはアテネ以外の場所からの聖火リレーを認めないだらうといつた理由から、組織委員会は聖火リレーの実施自体を断念した。³⁶だが、IOC総会で委員の間から聖火リレーの実施の要望が寄せられたことから、再び一九三八年三月末には、アテ

ネから東京までの聖火リレーの実施を検討する方向に入つた。³⁷返上前の聖火リレーに関する最後の議論が行われたのは、一九三八年六月の組織委員会で、この時には、アテネからシリア、バグダッド、テヘラン、カブール、インド、新疆、内モンゴル、北京、新京、朝鮮、門司を経て、東京へ入るルートに関して更なる調査、各方面への交渉を行うことが決められた。³⁸

ここまでみてきたように、東京オリンピックの聖火リレーについては、日本国内の神社からリレーを行う案、ギリシャから東京までリレーを行う案、聖火リレーを全く行わない案が併存し、議論錯綜状態にあつた。このことは、聖火リレーがオリンピックの伝統としてはまだ十分に定着していない状況、そして日本における東京オリンピック開催の意義が、中村が論じるように、国内の結束強化と国力の対外的顕示の両方に見出されていた状況においては当然であつたといえる。国家創造神話の発祥地で採火して東京大会の聖火リレーを実施すれば、それは、形式ではベルリン大会を模倣しながらも、意味の面では、日本の国家的伝統を示すことになつた。その案は、地方から出されたものであつたかもしれないが、結果的に、中央の、東京大会を国内の結束強化の事業として認識する人々の支持を獲得したと考えられる。一方で、ギリシャからの聖火リレーは、

オリンピックの起源が古代ギリシャにあることとともに日本が西洋文明とつながっていることを象徴するもので、日本がアジアの盟主であることを通過国で喧伝する絶好の機会と捉えることもできた。この計画に沿えば、対外的な国力の誇示のみならず、国家の優越性を確認することを通して国民意識の統合も達成しえたと考えられる。しかし、ギリシャからの聖火リレー計画は、日本の国家的伝統を軸にしたものではなく、あくまで、ベルリン大会の聖火リレーのタテマエ―近代オリンピックと古代ギリシャとの連続性を示す―を踏襲するものであった。国内リレー計画と国外リレー計画は、論理的に推し進めたら矛盾するはずであった。

ただ、いずれにしても、一九三八年七月、東京オリンピックは、聖火リレーに関する具体的な正式の方針が決定する―聖火リレーの意味づけをめぐる論争に決着がつく―前に返上された。一九三六年八月以降、約二年間、オリンピックのシンボルである聖火のリレーをめぐる議論が活発に交わされていたが、大会自体が幻となったのである。しかし、興味深いことに、オリンピック返上後の軍国主義的な色彩を一層強めた日本社会では、オリンピックの聖火や聖火リレーを形式的に模倣しようというイベントが、多く行われるようになる。次章では、返上後のオリンピック聖火リ

レーの形式的模倣イベントについてみる。

四 東京オリンピック返上と聖火リレーの形式的模倣

一九三七年七月の日中戦争勃発以降、東京オリンピック返上の風説が国内外で聞かれるようになった。日中戦争を非難する各国は東京大会開催反対を次々に表明し、国内においても物資・財政面の困難から開催が危ぶまれる中、一九三八年七月一日の閣議で、大会返上が決定した。

東京大会返上は、日本が国際的に孤立し戦争へと突入していく象徴的出来事として現在では語られているが、実際には、返上によって国際スポーツ・イベントのもつ理念が真つ向から否定されたとはいいがたい。大日本体育協会では、一九三九年一二月の理事会で、紀元二六〇〇年事業として将来のオリンピック招致のためにオリンピック委員会を設置し、競技施設の研究、海外宣伝、競技技術の研究調査を行うことを協議している³⁹。また、各地で、東京大会の代替になるような、あるいはベルリン大会を再現するようなイベントが催された。ベルリン大会の記録映画は、一九四〇年初頭に東和商事が輸入、体育協会が監修して公開された。「一九四〇年オリムピアはスクリーンで御覧下さい」⁴⁰等のうたい文句で大ヒットし、「民族の祭典」は『映画旬報』の年間ランキングの一位、「美の祭典」は五位に入っ

た。⁴¹大阪毎日新聞社神戸支局では、神戸在住の外国人の子弟と日本人の子供たちの運動会として、一九三九年に国際学童オリンピックを主催し、五輪旗の掲揚、国旗をかざした選手団の入場行進、表彰式等を、本物のオリンピックと同じように行った。⁴²一九四〇年年末から一九四一年の年始にかけては、大日本体育協会主催、愛知県体育協会・名古屋体育協会・名古屋新聞社後援で、名古屋の三星百貨店で美と力の展覧会が開催され、ベルリン大会の資料が展示された。⁴³オリンピック返上とはいつても、それは、オリンピックの理念の否定や拒否ではなく、東京オリンピックへの期待の残滓があつたことから、オリンピックを想起させるようなイベントが社会的な賛同を獲得したのである。

オリンピック返上後、聖火リレーは、日本の伝統として解釈され、日本の国家の歴史を表象するかたちで実施された。ベルリン大会の聖火リレーを形式的に模倣した最初のイベントは、日本陸上競技連盟主催、文部省・厚生省後援で、一九三八年一月四日から六日まで行われた聖矛継走である。戦勝祈願のため、六本の矛を、伊勢神宮からリレーし、三重の結城神社、愛知の熱田神社、静岡の三島神社、神奈川の鶴岡八幡宮、東京の靖国神社、明治神宮に奉納していくイベントで、明治神宮に奉納された最後の矛は、外苑競技場で秩父宮が出席して行われていた国民精神作興体

育大会の閉会式の演出に使われた。国民精神作興体育大会は、東京大会返上後に精神総動員を企図して開催された初めての体育イベントであり、聖矛継走は、この体育大会を神聖化する儀式であつたといえる。継走は、約一キロを一区間とし、先導二名、矛を持つ正選士一名、副選士二名、約三十名の衛団が進められ、一府四県総行程五二〇キロに、一万五千人が動員された。⁴⁵また、伊勢神宮の発行日には、第二放送で全国に実況中継された。⁴⁶

このイベントは、競技や競争ではなく、神社に矛を奉納する儀式で、戦時下に相応しい日本的な行事として創りだされていった。矛は、神事において神を招くためにもつ採物の一つであり、『日本書紀』の天岩戸の神話では、天鈿女命が持ったという。⁴⁷聖矛継走では、走る速度が定められていたほか、聖矛の受け渡しの儀礼の際には集団で一同敬礼後、「よろしくお願いいたします」「ご苦勞様でした」の挨拶を必ずかわすこと、各神社の祈願は約三十分、一揖、二拝、二拍手、二拝、一揖の参拜方式を実施することが決められていた。⁴⁸継走を極度に形式化することに特別な意味が見出され、矛の神聖性が強調されたのである。矛を持って走る選士は、学生のほか、各地域の中学校長、教育部長、体育協会会長や第三師団大佐等であつた。⁴⁹女子高校生もいたが、選士の多くは青年男子で、競走経験者から選ばれた

という⁵⁰。聖矛継走は、礼儀正しさを集団的な規律を重視し、共同体の価値観の強化するイベントで、そこで重要な役割を担わされたのは、戦時下の共同体の価値を体現した模範的な「銃後青年」⁵¹であったといえる。

一方で、聖矛継走は、オリンピックを想起させるイベントでもあった。国民精神作興体育大会の閉会式に持ち込まれた矛は、金栗四三（一九一二年の日本が初めて参加したオリンピックに出場したマラソン選手）から、孫基禎（一九三六年ベルリン大会で、マラソンで「日本人」として初めて金メダルを獲得した選手）へと手渡された。この時の様子について、下村海南は、「かつて海外の大会においてわが選手が優勝し日章旗が掲げられ君ヶ代の奏せらるゝのときを想像した⁵²」と書いている。聖矛継走それ自体は、神社に矛を奉納する極めて日本的な行事、あるいは、無数の人々の集団への献身を促すイベントとして意味づけられていたが、クライマックスで上演されたのは、日本のオリ

ンピックでの活躍の物語であった。また、聖矛継走の企画には、厚生省の注意で神火が戦勝祈願を表徴する矛に変更されたという経緯があった⁵³が、夜間は、先導が松明を掲げ、火を使った幻想的な光景が展開していた。聖矛継走の主催者側には、そのモデルをベルリン・オリンピックの聖火リレーに求めるといふ意識が根強くあったと考えられる。『名

古屋新聞』も、聖矛継走は、「その着想がベルリン・オリンピックアードにおけるアテネ・ベルリン間聖火リレーに由来する借物であったとしても、陸連が取りあげた結果のものは極めて日本のものに消化された⁵⁴」としている。西洋の形式を用いながらも、日本の国家創造神話、礼儀正しさを集団的な規律を表象することで、聖矛継走は、地域の共同体意識を強化し、日本国民の精神を総動員するための理想的なイベントとして各方面の支持を獲得したのである⁵⁵。

聖矛継走以降、オリンピック聖火リレーの形式的模倣が頻繁に行われるようになった。特に、戦後の国民体育大会につながる神宮大会、オリンピック代替イベントとして位置づけられ戦後のアジア大会につながる一九四〇年の東亜競技大会等の体育イベントで、オリンピックの聖火を模倣したような演出が欠かせないものになっていった。

神宮大会では、一九三七年の第九回大会閉会式で、「正面のスタンド前に並べられた篝火があかあかと点火⁵⁶」されたようだが、この時はまだ、それほど篝火の演出が社会的なインパクトをもっていたとは考えられない。大会報告書には、「従来やりつばなしの感ありし終了時に、今回は厳肅なる閉会式を挙行⁵⁷」したことは、「国民精神作興の現はれ」等の記述がみられるが、新聞紙面では、この閉会式の模様は、ほとんど報道されていない。また、この時には、

まだそれをリレーする発想はなかったと推察される。

しかし、東京大会返上と国民精神作興体育大会の開催を経て、神宮大会でのオリンピックの聖火を形式的に模倣するかのような演出は、大掛かりなものに変化している。厚生省に移管した一九三九年の閉会式では、長距離走者によって明治神宮の神火がスタジアムに運びいれられ、三百もの松明が点火された⁽⁶⁰⁾。新聞もそれを中心に報道していて、『東朝』は、「戦ひのあとに聖火燦」⁽⁶¹⁾、『読売』は、「聖火は映す尊き御姿」という見出しで、両紙とも、スタジアムに火が燃える閉会式風景の写真を掲載している。一九四〇年の大会でも、閉会式で同様の演出および報道がみられたほか、開会式にあわせて二十日間にわたる奉祝継走が行われた。青森、樺太、秋田、茨城、福井、新潟、鹿児島、沖縄、宮崎、長崎、徳島、高知、愛知、島根、和歌山、台湾、朝鮮（釜山）、関東州（大連）を出発点とし、各道府県民を代表して道長官、府県知事の書いた奉祝文が大会会場へと運ばれ、沿道市区町村民もこれに参加したという⁽⁶²⁾。

聖火リレーを形式的に模倣した演出は、国際競技大会でも採用された。満州新京で開催された日滿華交歓競技大会（一九三九年八月三十一日・九月一日）では、明治神宮の燈具によって新京神社で火が起こされ、その火と、前年満州各地の靈廟からリレーで集められ新京神社で燃え続けてい

た火とが合わせられて、開会式に聖火として登場、大会期間中燃やされ続けた。日滿華交歓競技大会では、日本選手団の出発前に、皇居遙拝、国歌斉唱、秩父宮殿下御下賜の大日章旗を捧持しての結団宣言等が、オリンピック時と同様に行われており、体育関係者のオリンピックに対する認識が大会運営にもそのまま持ち込まれたと考えられる⁽⁶³⁾。一九四〇年六月には、日本、満州、中国、フィリピン、ハワイが参加して、より規模の大きな紀元二六〇〇年奉祝東亜競技大会が東京と大阪で行われたが、この時にも閉会式の演出に火が使われ、その模様は新聞でも報道された⁽⁶⁴⁾。

聖火リレーの形式的模倣イベントには、新聞社の事業として開催されたものもあった。朝日新聞九州支社と日本観光連盟九州支社の主催で行われた九州御神火継走は、青年に集団で足並みをそろえて走ることを要求し、各地の神社で戦勝祈願を行うという、聖子継走とよく似たイベントであった。一九三九年二月一日に高千穂峰山頂で国威宣揚武運長久、敵国降伏の大祈願祭を実施し、御神火は、一四日間かけて各地の官国幣神社に参拝しながら九州を一周した。九州一周を駆け巡った神火は、最終日に霧島神宮に奉納されている⁽⁶⁵⁾。管見の限りでは、他にも名古屋新聞社が一九四〇年五月に奉仕事業として行った祭器窯入れの古儀に際した熱田神宮の神火のリレーがある⁽⁶⁶⁾。

また、体育イベントではないが、一九三九年春のニューヨーク万博へは、ミス・ニッポンの月本映子によって、出雲大社の聖火が日米親善の火として運ばれた。『読売』では、ニューヨーク博覧会協会東京事務局長藤田国之助が、その意義を次のように説明している。

わが国神代からの聖火が、このやうに現代にまでそのまゝの発火様式を残して伝へられてゐるところに、神国日本の大きな意義があるのです。そしてこの重大時局に、日本の真の姿を世界各国にはつきりと認識させる重要な役割をもつ国際親善使節の手に、この聖火が握られ、はじめて海を渡るといふところに今回の意義があるので、単に物珍らしい宣伝手段のためやオリンピックの模倣程度に考へて騒ぎたてることは躊躇しなければならぬことだと思ひます。海を越え、地球を廻つて行く聖火、これはわが神国日本が世界にしめす八紘一字の精神を象徴したものでなければなりません。

藤田は、今回のニューヨーク万博への聖火の派遣がオリンピックの模倣であることを否定しているが、ここで表明されているのは、国家の伝統や精神を世界に誇示するといふ考えであり、東京オリンピック開催の政治的意義と何ら

変わらない。東京オリンピックの聖火リレーが国外から実施されていたとしたら、ギリシヤの火が用いられたはずであり、国内から実施されていたとしても、国内で採火された火が海外にもたらされることはなかった。万博への出雲大社の聖火の派遣は、オリンピックという枠組みではできなかった次元で対外宣伝を試みたものだとして理解することもできよう。ただ、このイベントは、外に向けた国威の発揚というよりは、出雲大社の聖火が「日米親善の焰」と名付けられていたことからわかるように当時の日米関係の緊張緩和を目的としており、おおむね思惑通りに進行した。『ニューヨーク・タイムズ』も、出雲大社は日本最古で縁結びの神様として有名であり、一万一千マイルもの距離をミス日本によって運ばれてきた出雲大社の聖火は日米両国の平和と友好の歴史が千五百年間燃えている出雲大社の火のように輝かしく永遠に続くようという日本国民の気持ちの象徴であると報道している。

ここまでみてきたように、四〇年東京オリンピックの返上以降、聖火リレーを模倣するかのようないイベントが一種の流行となった。マス・メディアではそれらのイベントが日本の伝統に由来することが語られたが、それらの発想の契機がオリンピックの聖火リレーであるという意識も見え隠れしていた。イベントの主催者やマス・メディアは、聖

火リレーの形式に日本の国家創造神話や共同体の集団意識を結びつけることによって、聖火リレーの模倣イベントを日本の伝統として意味づけた。オリンピックの聖火リレーの形式的な模倣は、日本と西洋との文化的な連続性と日本の国家的伝統の両方を体现していたといえる。だからこそ、これらのイベントは、国民のなかに存在していた様々な立場からオリンピック東京大会開催を待ち望む気持ちを戦時下のイデオロギーに沿うかたちで吸収し、一定程度の盛り上がりをもせたのである。

五 結論・戦後の聖火リレーの前史としての戦前の聖火リレー

聖火リレーの形式的模倣は、一九四一年頃を境に行われなくなつたが、戦後の体育イベントですぐに再開された。国民体育大会では、一九四七年の第二回大会から聖火が大会のシンボルマークとして採用され、一九四八年から大会旗リレーが、一九五七年から炬火リレーが始まつた。また、東京オリンピック開催の実現への試金石ともなつていた一九五八年のアジア大会では、大会史上初めて聖火リレーが行われ、前回大会のマニラの会場で太陽光から採火した聖火が、沖縄経由で鹿児島から東京までリレーされた。

なぜ日本で初めてのオリンピックが開催される前に、こ

れほどまで、オリンピックの聖火リレーを模倣するようなイベントが盛んに行われていたのか。その答えは、本稿でみてきたように、四〇年東京オリンピックが幻となつた直後の時期に聖火リレーが日本の伝統であるかのように意味づけられ定着していたことにあるのではないかと考えられる。東京オリンピック返上後、聖火は西洋的であるという認識に基づいて、別の神聖なもの―聖矛や神火―に持ち替えられた。また、イベントの主催者は、何か神聖なものにリレーするという一九三六年ベルリン・オリンピックから始まつた明らかに西洋的な起源をもつ形式を、火や矛といったシンボルの神聖性を沿道に流布し、地域共同体の意識を統合する上で意義のあるもの、日本古来の駅伝と類似したものと解釈し、戦時体制と矛盾しないものとして取り入れていった。ベルリン・オリンピックの聖火リレーにおいてみられた観客を動員する公的祝祭という側面は、日本における聖火リレーの形式的模倣イベントでもみられた。人々は、各地の沿道に登場した神火や聖矛、スタジアムに灯された炬火を、日本の国家的伝統を表象する神聖なものとして観て、かつ楽しんでいたと考えられる。東京大会の準備段階では、ベルリン大会から始まつた聖火リレーはオリンピックの伝統として十分に定着していたわけではなかつた。東京オリンピックの聖火リレーを日本の国家的伝統

を示すものとするか、オリンピックの歴史を示すものとするかも、明確ではなかった。しかし、東京大会返上後、ベリン・オリンピックの聖火リレーにあった「聖火」「リレー」「公的祝祭」の各要素が、当時の日本の社会状況に
応じて読みかえられていったのである。

結果として、一九四〇年には実現しなかったギリシャから東京への聖火リレーオリンピックの起源が古代ギリシャにあること、東京や日本が西洋と肩を並べる文化をもっていることを示す聖火リレーが実施されたのは、一九六四年であった。六四年東京オリンピックの聖火リレーと四〇年東京オリンピック返上後の聖火リレーの形式的模倣イベントとの違いとしては、次の三点が挙げられるだろう。

第一に、戦時下のイベントは、新聞紙面でもそれほど大きく取り上げられてはおらず、取り上げられていたとしても多くはローカルなニュースとしてであった。例えば、御神火九州継走は、朝日新聞九州支社の主催事業で、写真帳からは、各地で神火が大勢の人々に迎えられていたことが伺える。また、『大阪朝日新聞』の地方版（北九州版、福岡版、長崎版、佐賀版、大分版、熊本版、鹿児島沖縄版）は、歓迎準備から地元の神社での儀式の様子まで、御神火継走関連のニュースを大きく扱っている。しかし、『東朝』では、一・五段程度の記事で、写真の掲載も少ない。御神

火九州継走は、九州以外に住み、朝日新聞以外の新聞を購読する人々にはほとんど知られていなかっただろう。

第二に、ギリシャで採火され一・二カ国を通過した東京オリンピックの聖火と比べると、戦前日本の「聖火」（多くの場合は神社の火）の対外宣伝効果は、ニューヨーク万博に出展された出雲大社の聖火を除けば、ほとんどなかった。国際イベント開催の機会が失われた状況において、聖火リレーの形式的模倣イベントの多くが国内で完結していた。

ただし、国内で完結していた戦前期のイベントでは、聖火リレーが日本の伝統であることが強調されていたのに対し、六四年大会では、こうした意味づけは、表面では影をひそめたと考えられる。

メディアの介在の弱さとイベントとしての規模の小ささに起因して、第三に、聖火リレーの形式的模倣イベントに対する人々の反応には、地域間で温度差があったと推察できる。聖矛継走について、『体育日本』には、宇治山田から東京までの沿道各地が継走を熱狂的に歓迎していたのに対して、東京の人々が冷淡であったとある。戦時下の聖火リレーの形式的模倣の多くは、国内や地域社会のイベントとして行われ、あらゆるマス・メディアがこれらのイベントを大々的に報道したわけでもない。国民精神総動員という意図があったとはいえ、これらのイベントに組み込まれ

なかつた層が地域によつては存在したと考えられる。

ただ、これらの相違点はあるながらも、六四年東京オリンピックの聖火リレーの日本各地での受容のあり方の基層に、戦時下の聖火リレーの形式的模倣イベントがあつたと考えられる。六四年の東京オリンピックの聖火リレーがどのように執行われ報道され人々に受容されていったのかという問題については、戦時下の聖火リレーの形式的模倣イベントにおいて、神社との結びつき、集団への献身的態度の称揚、礼儀正しさや規律の重視がみられたという点を踏まえた上で、オリンピック・ムーブメント全体の聖火リレーの歴史を参照し、詳細に検討していく必要がある。

註

- (1) 日本放送協会放送世論調査所『東京オリンピック』（日本放送協会放送世論調査所、一九六七年）
- (2) 有山輝雄「戦時体制と国民化」『年報・日本現代史』第七号（二〇〇一年）、一—三六頁。
- (3) マカールン、ジョン・J／光延明洋訳「近代社会におけるオリンピックとスペクタクル理論」『世界を映す鏡』（平凡社、一九八八年）所収、三八七—四四二頁、四〇六頁。
- (4) マカールン、ジョン・J／柴田元幸＝菅原克也訳『オリンピックと近代』（平凡社、一九八八年）
- (5) Finding, J. E.=Pelle, K. D. ed., *Encyclopaedia of the Modern Olympic Movement*. (Green Wood Press, 2004)
- (6) ホブズボウム、E＝レンジャー、T／前川啓治＝梶原景昭他訳「創られた伝統」（紀伊国屋書店、一九九二年）
- (7) Van Rossem, G. ed., *The Ninth Olympiad Amsterdam 1928 Official Report*. Amsterdam J. H. De Bussy, p. 965. (<http://www.aafa.org/6olic/OfficialReports/1928/1928.pdf>)
- (8) 日本体育協会編『第九回国際オリンピック競技大会報告書』（大日本体育協会、一九三〇年）、一七頁。
- (9) 『東日』一九二八年七月二九日朝刊
- (10) 『東朝』一九三二年七月八日朝刊
- (11) 大林太良「太陽と火」谷川健一ほか『日本民俗文化大系第二巻』（小学館、一九八三年）五一—一四頁。
- (12) Organisationskomitee Fur Die XI. Olympiade Berlin 1936 E. V., *The Xth Olympic Games Berlin, 1936 Official Report*. Volume I. Wilhelm Limpert. (<http://www.aafa.org/6olic/OfficialReports/1936/1936v1sum.pdf>)
- (13) *Ibid.*
- (14) ハート・デイヴィス、D／岸本完司訳『ヒトラーへの聖火』（東京書籍、一九八八年）
- (15) モッセ、ゲオルゲ・L／佐藤卓巳＝佐藤八寿子訳『大衆の国民化』（柏書房、一九九四年）
- (16) 前掲『ヒトラーへの聖火』

- (17) 中村哲夫「ナチス・オリンピックと日本」『三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学』第四五号(一九九四年)、一—一—二四頁。
- (18) 『東日』一九三六年八月一日朝刊
- (19) 中村哲夫「第一二回オリンピック東京大会研究序説(一)」『三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学』第三六号(一九八五年)、一〇一—一二頁。池井優「一九四〇年『東京オリンピック』」入江昭リ有賀貞編『戦間期の日本外交』(東京大学出版会、一九八四年)所収、二二—三三七頁。
- (20) 一九三六年六月には同盟通信社が本格的業務を開始し、同年七月には内閣情報委員会が設置された。内閣情報委員会は、軍部のリーダーシップによって一九三七年二月に内閣情報部に強力改組された(内川芳美『マス・メディア法政策史研究』(有斐閣、一九八九年))。
- (21) 「紀元二千六百年に関する宣伝方策大綱」(一九三七年二月八日)『言論統制文献資料集 第二〇巻』(日本図書センター、一九九二年)、五八頁。
- (22) 古川隆久『皇紀・万博・オリンピック』(中央公論社、一九八八年)
- (23) 日本放送協会編『ラジオ年鑑昭和二二年版』(大空社、一九八九年)、三八頁。
- (24) 『東朝』一九三六年八月—三日期朝刊
- (25) 『東朝』一九三六年八月二日夕刊
- (26) 『東朝』一九三六年八月五日朝刊
- (27) 前掲「第一二回オリンピック東京大会研究序説(二)」
- (28) 永井松三編『報告書』(第一二回オリンピック東京大会組織委員会、一九三九年)では阿蘇山と記述されているが、正しくは高千穂峰と考えられる。
- (29) 『東朝』一九三六年九月一七日期朝刊
- (30) 同右。
- (31) 『読売』一九三六年九月二二日期朝刊、『東朝』一九三七年三月一七日期朝刊、四月一四日期朝刊、前掲『報告書』
- (32) 『読売』一九三六年九月二二日期朝刊
- (33) 同右。
- (34) 中村(前掲「ナチス・オリンピックと日本」)によれば、副島は、ベルリン大会の挙国一致のオリンピック運営に批判的で、一九四〇年東京大会決定直後の時期には、東京オリンピックを大日本体育協会主導の純粋なスポーツ大会として開催するべきだと考えていた。
- (35) 『東朝』一九三六年十月二日夕刊
- (36) 前掲『報告書』。ただし『東朝』(一九三七年四月二二日期朝刊)は、聖火リレーではなく、ギリシャからの聖火リレーを断念したと報じている。
- (37) 前掲『報告書』、『東朝』および『読売』一九三八年三月二九日期朝刊
- (38) 前掲『報告書』
- (39) 『体育日本』第一八巻第二号(一九四〇年二月)、九〇頁。
- (40) 『キネマ旬報』七一四号(一九四〇年五月)、九頁。

- (41) 『東和映画の歩み』(東和映画、一九五五年)
- (42) 『大阪毎日新聞』一九三九年五月二六日夕刊、二七日朝刊、二八日朝夕刊
- (43) 『名古屋新聞』(以下、『名古屋』)一九四〇年一月二二日朝刊、一九四一年一月九日朝刊
- (44) 『読売』一九三八年一月二二日朝刊
- (45) 『名古屋』一九三八年一月五日夕刊
- (46) 同右。
- (47) 神田より子「採物」福田アジオ他編『日本民俗大辞典(下)』(吉川弘文館、二〇〇〇年、二三六頁)。
- (48) 『読売』一九三八年一月二二日朝刊
- (49) 『名古屋』一九三八年一月五日朝刊
- (50) 『東朝』一九三八年九月六日朝刊、内閣情報部編『写真週報』第四〇号(一九三八年、一月一六日)
- (51) 『名古屋』一九三八年一月五日夕刊
- (52) 『体育日本』第一六卷第一二号(一九三八年二月)、八頁。
- (53) 『東朝』一九三八年九月六日朝刊
- (54) 『読売』一九三八年一月二二日朝刊ほか。
- (55) 『名古屋』一九三八年一月八日朝刊
- (56) 例えば、『東日』(一九三八年一月八日朝刊)は、「戦勝祈願聖矛継走は終始『走る』ことの意味を沿道に宣揚すると共に、敬神愛国の念を鼓吹することに多大の効果を奏した(中略)この成功を基礎として二千六百年祝典には日向から檜原へ、東京へのコースを選び『走る』もの、総動員を企
- (57) 画化すべきである」と評価した。
- (57) 明治神宮大会は、一九二四年に始まった体育イベントで、一九二四年から一九二七年までは毎年開催、一九二七年から一九三九年までは隔年開催、一九三九年から一九四三年までは毎年開催された。
- (58) 『第九回明治神宮国民体育大会報告書』(厚生省)一六頁。
- (59) 同右。
- (60) 『第十回明治神宮国民体育大会報告書』(厚生省)
- (61) 『東朝』一九三九年一月四日朝刊
- (62) 『読売』一九三九年一月四日朝刊
- (63) 『東朝』および『読売』一九四〇年一月四日朝刊
- (64) 『紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮国民体育大会報告書』(厚生省)
- (65) 松澤一鶴「日満華交歓競技会報告くろがね道中双六」『体育日本』第一七卷第十号(一九三九年十月)、五一―九頁。
- (66) 『東朝』および『読売』一九四〇年六月一日朝刊
- (67) 『アサヒ・スポーツ』第一七卷第五、六号(一九三九年三月)
- (68) 『名古屋』一九四〇年五月二九日朝刊、三〇日夕刊
- (69) 『読売』一九三九年五月四日朝刊
- (70) 内閣情報部編『写真週報』第六六号(一九三九年五月二四日)
- (71) *New York Times*. 1939. JUNE. 2, 3.
- (72) 『第十二回明治神宮国民体育大会報告書』(厚生省)には、十二回大会では、「従来とすすれば一部で外国の模倣である

と言はれてゐた華麗な閉会式を日本化する為に、前年大会には日没後「光」を利用して絢爛たるものであつたが研究の成果「光」を用ひざることとし、日没時の壮嚴さの裡に閉会式を終ること」にしたとある。

(73) 日本体育協会監修『国民体育大会の歩み』(都道府県体育教育連絡協議会、一九七九年)

(74) 『第三回アジア競技大会報告書』(第三回アジア競技大会組織委員会、一九五九年)

(75) 『御神火九州継走大会記念写真真帖』(大阪朝日新聞九州支社、一九三九年) 朝日新聞大阪社史編修センター所蔵

(76) 『大阪朝日新聞』一九三九年二月(縮刷版および地方版マイクروفイルム)

(77) 『東朝』一九三九年二月一日―二十五日

(78) 川崎秀二『聖矛継走五百杆の感激』『体育日本』第一六卷第二一―二二号(一九三八年十二月)、二八一―三三三頁。

本研究では、朝日新聞大阪社史編修センター並びに日本体育協会資料室に所蔵された資料を利用させていただいた。ここに記して、感謝する。